

Title	書評：山口仁著『メディアがつくる現実、メディアをつくる現実：ジャーナリズムと社会問題の構築』勁草書房、2018年
Sub Title	
Author	津田, 正太郎(Tsuda, Shōtarō)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2019
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.24 (2019. 7) ,p.210- 215
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20190706-0210

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：

山口仁著『メディアがつくる現実、メディアをつくる現実
——ジャーナリズムと社会問題の構築』

勁草書房、2018 年

津田 正太郎

ツイッターのような SNS における名物の一つが「マスゴミ」批判である。

偏向報道、報道被害、記者クラブによる情報の囲い込み、記者会見における質問の酷さ、結論ありきの取材、スポンサー企業への配慮等々、政治的立場の違いを越えて、マスメディア批判の材料は尽きることがない。そうした批判のなかで時に用いられるのが「報道しない自由」という言葉である。つまり、マスメディアは「報道の自由」という言葉で自らの正当性を訴えるにもかかわらず、自分たちに都合の悪い事柄は報道せず、人びとの目に触れないようにしてしまうとされる。こうしたマスメディアのご都合主義的な態度を批判する言葉が「報道しない自由」なのである。

この批判を学術的に言い換えれば、ノンディシジョン・メーカー、または二次元的権力の行使ということになる（Bachrach and Baratz 1962: 952; ルークス 1995: 32）。すなわち、ある問題が人びとの話し合いの場に出てこないようにさせるための権力の行使ということである。議題にならない以上、その問題は現状のまま放置され、そこから利益を得ている者および不利益を被っている者の関係は固定され続ける。

大石裕はこのような権力論の発想を政治コミュニケーション論の領域に導入し、マスメディアによるアジェンダ設定が権力行使過程となりうることを論じた（大石 1998: 78）。すなわち、マスメディアが何かを報道する／しないということは紛れもなく権力行使の一形態なのであり、先に挙げた「報道しない自由」という言葉は大石のこうした主張と軌を一にするものと言うことができる。そして、このような観点からのジャーナリズム批判の背後には、「本来は報道されるべき事柄が報道されていない」という問題意識が存在するはずであり、実際、ネット上ではそうした指摘が数多くなされている。

しかし、ツイッターでの「報道しない自由」批判をみていると、首をかしげることが少なくない。筆者の目からみると信憑性やニュースバリューの乏しい出来事をマスメディアが取り上げないことについて、「報道しない自由」という観点からの批判が無数に展開されているのである。そんな事柄をマスメディアが取り上げたら、それこそ誤報または偏向報道ではないかと思うことが頻繁にある。しかし、それはあくまで「筆者の目からみて」の話でしかない。そうしたツイートをする者にとって、それはマスメディアが取り上げ、人びとが注目すべき事柄なの

津田正太郎「書評：山口仁著『メディアがつくる現実、メディアをつくる現実——ジャーナリズムと社会問題の構築』」

『三田社会学』第 24 号 (2019 年 7 月) 210-215 頁

だろう。すなわち、ある人物にとっては取り上げるに値しない問題が、別の人物にとってはきわめて重大な問題として立ち現れることがありうるのである。こうした「報道しない自由」批判の多様性は、アジェンダ設定の次元での価値判断の違いを可視化させていると言うことができる。

前置きが長くなったが、本書『メディアがつくる現実、メディアをめぐる現実』は、このようにジャーナリズム批判が人口に膾炙したのみならず、批判者の依って立つ立場の違いが鮮明になった現代を象徴する著作である。現在では、マルクス主義に立脚したイデオロギー批判が与えてくれたような批判者の確固たる足場は消失し、特定の問題について個々人がどう判断すべきかという次元のみならず、何がアジェンダになるべきかという次元でも対立が顕在化しているようになっているのである。

そうした時代状況において、マスメディア分析の客観性を担保するための手段として本書が依拠しているのが、社会構築主義の立場からの社会問題研究である。社会問題が様々なアクターの「クレーム申し立て活動」やそれを伝えるマスメディア報道によって構築されていく過程を分析する研究は、すでに数多く展開されている。本書の重要な貢献は、マスメディアを通じて社会問題が構築されていく過程のみならず、それと付随して（場合によっては当初の問題とすり替わって）ジャーナリズムの問題が構築されていく過程を分析に組み込んでいる点に求められる。従軍慰安婦問題がしばしば朝日新聞の問題に還元されるかたちで語られることを踏まえても、本書のこうしたアプローチはきわめて時宜にかなうものと言うことができる。

そして、社会構築主義アプローチによる分析が分析者自身の現実認識や価値判断を括弧に入れようとするのと同様に、本書のアプローチはジャーナリズムやその報道に対する判断を保留する点にその特色があると言ってよい。厳密な意味で社会構築主義の立場に依拠する場合、「社会問題が現実にはいかなる状態にあるのか」「いかに解決されるべきなのか」等の議論を控えねばならないことはよく知られている（キツセ／スペクター 1992: 150）。すなわち、些細な問題が過剰に構築されている、もしくは重大な問題が構築されていないといった判断や批判は避けられねばならないということである。そこから派生して、本書のアプローチからは「報道しない自由によって隠蔽された真実」の暴露や「ジャーナリズムのあるべき姿」の提唱は導かれな

い。

これは一般的なジャーナリズム批判とは一線を画するアプローチだと言うことができる。通常のジャーナリズム論は、それを論じる者が想定する「真実」や「ジャーナリズムのあるべき姿」から実際の報道が逸脱していることを批判する（鶴木 1999: 192）。そのさい、「報道しない自由によって隠蔽された真実」をめぐる判定や「体制批判こそがジャーナリズムの使命」といった価値観が無批判に組み込まれ、ジャーナリズム論が社会科学としてではなく、その論者の態度表明に留まってしまうという問題はいまでも根強く残っている。本書はジャーナリズム批判が人口に膾炙し、それが有する党派性がこれまで以上に際立つ時代において、なお理論的前進を図ろうと試みる著作なのである。

ここで本書の構成をおおまかに紹介しておこう。まず第一部の理論編では、社会構築主義の立場からの社会問題研究の展開が概観、整理され、「申し立てられたクレイムの内容の真偽を問うことを目的とはしない」という立場が改めて提示される (p.29)。次に、モラル・パニック論を叩き台として、社会構築主義にもとづく社会問題研究とマスメディア研究との接合が図られている。モラル・パニック論は、社会問題の構築のされ方についての「べき論」(社会問題は客観的に構築されるべきだとの発想)を内包していることがその難点だとされている。そこから本書の理論的考察の核心とも言うべき「二重の過程」、すなわち社会問題の構築過程と、「ジャーナリズムの世界」の構築過程とにかんする検討が行われる。

本書の第二部の前半では事例研究として、水俣病事件報道、ニュースステーションによるダイオキシン問題報道、ネット上での新聞報道批判の分析が行われている。ここで注目されるのは、上述の「二重の過程」が同時に「二重の排除」を伴っているという指摘である。社会問題とジャーナリズムの世界という二重の構築過程のうち、いずれかの過程が生み出す排除に注目が集まると、もう一つの過程が生じさせる排除が見えにくくなるという。ダイオキシン問題報道を例にとるなら、当初の「ごみ焼却炉が発生させるダイオキシン」の問題からニュースステーションの報道が引き起こした風評被害の問題へと構築のされ方がシフトした結果、「農薬汚染としてのダイオキシン」の問題が構築される可能性が排除されてしまったというのである。

第二部の後半では、ジャーナリズムに対する信頼性の問題が提起され、インターネット時代におけるジャーナリズム論のあり方に考察が本書の結びとなる。ここでとりわけ重要なのは、インターネット上でのメディア批判またはジャーナリズム論はそれ自体で強い党派性を帯びるがゆえに、「対話」を不可能にしてしまっているという以下の指摘だろう。

あるジャーナリズムの過程で再生産されている価値観・イデオロギーに賛同できない人々の間で、そうしたジャーナリズムに対して否定的な論評が儀式として行われることで、かれらの間で共有されている価値観の保守・維持が図られる。一方、ある集団にとって好ましい価値観がジャーナリズムで再生産されているとみなされる場合には、それを賞賛するジャーナリズム論がなされることでかれらの間で共有されている価値観が維持・再生産されるのである。(本書: 234)

インターネット上での政治論議がメディア批判とほぼ不可分のかたちで行われているのをみても、こうした指摘は納得がいく。

以上のように本書は、インターネット時代にジャーナリズム論が直面している難問を正面から受け止め、その新たな可能性を切り開こうとしているという点で、きわめて挑戦的な著作であるといえる。しかも、理論構築という意味ではやや弱くなりがちな社会構築主義のアプローチを採用しながらも、果敢に理論構築に挑んでいるという点でも高く評価できる。

しかしながら、こうしたアプローチに気になる点がないわけではない。本書では「構築主義

的アプローチが社会問題研究における唯一無二のアプローチである必要はない」と論じられている以上（本書: 29）、アプローチそのものを否定する必要はなく、むしろ棲み分けを図ることが学術的な多様性を担保するうえでも必要である。だが、社会構築主義がそれまでの研究の不十分さを指摘しながら登場したことを踏まえても、そのアプローチの不十分さもまた指摘されてしかるべきだろう。

まず気になるのが、社会構築主義の立場からの社会問題研究においてしばしば取り上げられるトピックであるオントロジカル・ゲリマンダリング(ontological gerrymandering)、いわゆる OG 問題である（ウールガー／ポーラッチ 2006: 191）。つまり、「社会問題が現実にはいかなる状態にあるのか」を問わないと標榜しつつも、実際には現実にかんする想定を密かに持ち込んでしまっているのではないかという問題提起である。そして、本書においても OG ではないかと疑われる点が実はある。

一つは、水俣病問題報道にかんする分析である。山口氏は全国紙が「水俣病事件を社会問題として構築・構成できなかった新聞報道自らの過去を不問にするという、時間を越えた『現実の構築・構成』を行っている」と指摘している（本書: 115）。すなわち、1950年代末から1960年代初頭にかけて、全国紙はチッソの労働争議に紙面を割く一方、水俣病報道についてはほとんど報じなかった。こうした瑕疵を抱えているにもかかわらず、全国紙はそれを隠蔽しているというのである。山口氏の分析を参照する限り、この指摘自体はまったく妥当なものだと言わざるをえない。しかしこの指摘は、全国紙が水俣病事件を報道しなかった時点において水俣病が実際に発生していたということを想定しない限り、意味をなさないはずである。仮に水俣病が発生していなかったとすれば、「問題が発生していなかった時期に報道していなかった」と指摘をしているのと同じになってしまうからである。

もう一つは「ネットが登場した現在でも、調査データが示すように、マス・メディアの信頼性が直ちに揺らいでいるわけではない」という指摘である（本書: 216）。社会調査によって生み出される現実像は構築されたものにほかならず、したがって社会構築主義の立場に依拠する限り、マスメディアへの信頼性が揺らいでいるか否かを明言することはできないはずである。事実、2019年1月29日付の日本経済新聞社の報道によると¹⁾、若い世代ほどマスメディアに不信のまなざしを向ける割合が大きく上がっているとされる。したがって、マスメディアに対する高い信頼の存在を所与とすることはできない。

社会構築主義について研究を重ねてきた山口氏をして OG を抱え込んでしまうというのは、山口氏個人の問題というよりも、「現実の引力」のなせる現象ではないかと思える。つまり、現実の状態にかんする自らの判断をいくら括弧に入れて切り離そうとしても、どこかでその引力に引き寄せられてしまうのではないか、ということである。この点について、OG 問題を提起したウールガーとポーラッチは次のように述べている。

たぶん、あらゆる説明（解釈）の試みは、少なくともある事態を客観的であると提示する

ことに依拠する。おそらく、解釈すべき現象を決定するような、信頼することができ、依拠することができ、非流動的であるものが、つねに存在しなければならない。(ウールガー／ポーラッチ 2006: 205)。

無論、それでも現実の引力に抗い、記述の客観性を追求するアプローチもありうるだろう。山口氏は本書の「あとがき」において、ジャーナリズム研究が「社会問題とされるもの」や「ジャーナリズムとされるもの」を括弧に入れ、「自分自身が依って立つ価値観すらもポーズでなく疑う姿勢」が必要だと論じている(本書: 293、強調は原著者)。それこそが、党派的なジャーナリズム批判を乗り越えて、「社会に『統合』をもたらす、少なくとも共通の議論の土台を作っていく」ために必要だというのである。

しかしながら、筆者の判断からすると、このような方向性は必ずしも生産的ではないように思われる。というのも、政治的分断状況があるなかでは分析者がどれほど記述の客観性を追求しようとも、そこに党派性を見出そうとする欲望は絶えることがないと考えられるからだ。先に筆者がやったような OG のあぶり出しが行われ、その存在が「暴露」されることで、研究の価値を全否定するような言説が展開される可能性もある(無論、仮に OG が含まれていたとしても、本書の価値は全く揺るがない)。OG がないと言われれば、かえってそれを探したくなるものである。

とはいえ、過度に党派的なジャーナリズム批判から距離をとろうとする山口氏の姿勢は、筆者も共感するところが大きい²⁾。先に述べたように、ジャーナリズム批判において意見の分かれる判断や価値観が自明なものとして議論に組み込まれていることへの違和感は、筆者も共有する感覚である。しかし、たとえば「事実に即さない報道は控えるべきだ³⁾」、「貧困や差別は解消されるべきだ⁴⁾」等々の筆者の価値観について、一步引いて眺めることはあったとしても(山口氏からすれば「ポーズ」にすぎないということになる)、自身の依って立つ価値観を疑い続けた果てにあるのが追求に値するものなのかについて、筆者は確信がもてない。

結局のところ、筆者の判断は、自己の価値観を自覚したうえで、その価値観に左右されない分析を目指すというヴェーバー的なものにとどまる(ヴェーバー 1998: 30)。社会科学が「目に見えるとは限らないもの」を扱おうとする限り、その知見の妥当性を疑おうとすればいくらでも疑うことはできるのであり、それならば最初から分析者の依って立つ場所をわかりやすく提示したほうがむしろ良いのではないかとすら思える⁵⁾。

政治的分断状況とジャーナリズム批判とが分かちがたく結びつき、メディア／ジャーナリズム研究者の存在意義そのものが問われるなかであって、それでもなお研究者が前に進むために必要なのは、現実から距離を取るための努力ではなく、そこに近づくための努力ではないだろうか⁶⁾。

【註】

- 1) 日本経済新聞社（2019）「『信頼できる』は自衛隊がトップ 本社郵送世論調査」
[https://www.nikkei.com/article/DGXMZO40237230Q9A120C1905M00/\[2019/4/1 アクセス\]](https://www.nikkei.com/article/DGXMZO40237230Q9A120C1905M00/[2019/4/1 アクセス])
- 2) 何が過度で、何が過度でないかは言うまでもなく筆者の判断である。
- 3) 何が事実で何が事実でないかは筆者の判断である。
- 4) 何が解消されるべき貧困または差別かについても解釈の余地はある。
- 5) 拙著『ナショナリズムとマスメディア』（2016年）の冒頭において筆者が最初に「リベラル・ナショナリズム」に立脚することを明言したのは、ナショナリズムというきわめて党派的、論争的になりやすいテーマを扱うにあたっては書き手の客観性を標榜することがほぼ不可能だという判断に基づく。
- 6) 研究ノートではあるが、津田（2019）において別の角度からこの点について論じた。

【文献】

- ヴェーバー、M.（1998）富永祐治ほか訳『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波書店。
- ウルガー・S. /ポーラッチ・D.（2006）平英美訳「オントロジカル・ゲリマンダリンク 社会問題をめぐる説明の解剖学」（平英美／中河伸俊編『新版 構築主義の社会学 実在論争を越えて』世界思想社）。
- キツセ、J./スペクター、M.（1990）村上直之ほか訳『社会問題の構築 ラベリング理論をこえて』マルジュ社。
- 大石裕（1998）『政治コミュニケーション 理論と分析』勁草書房。
- 津田正太郎（2016）『ナショナリズムとマスメディア 連帯と排除の相克』勁草書房。
- （2019）「研究ノート 下衆の勘ぐりの極北 『動機』の理解をめぐる研究の展開」（『社会志林』65巻4号、pp.19-36）。
- 鶴木眞（1999）「国際ニュースとメディア・フレーム」（鶴木眞編『客観報道 もう一つのジャーナリズム論』弘文堂）。
- ルークス・S.（1995）中島吉弘訳『現代権力論批判』未来社。
- Bachrach, P. and Baratz, M. (1962) 'Two faces of power,' in *The American Political Science Review*, vol.56(4), pp.947-952.

（つだ しょうたろう 法政大学）